九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

福岡県緒方言アクセント

稲川, 順一
九州大学文学部助手

https://doi.org/10.15017/12097

出版情報：語文研究. 44/45, pp.61-76, 1978-06-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

福岡県諸方言アクセント

稲川順一

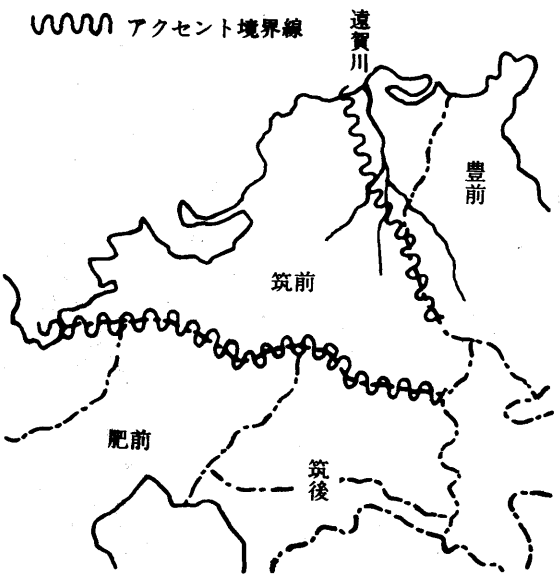
序

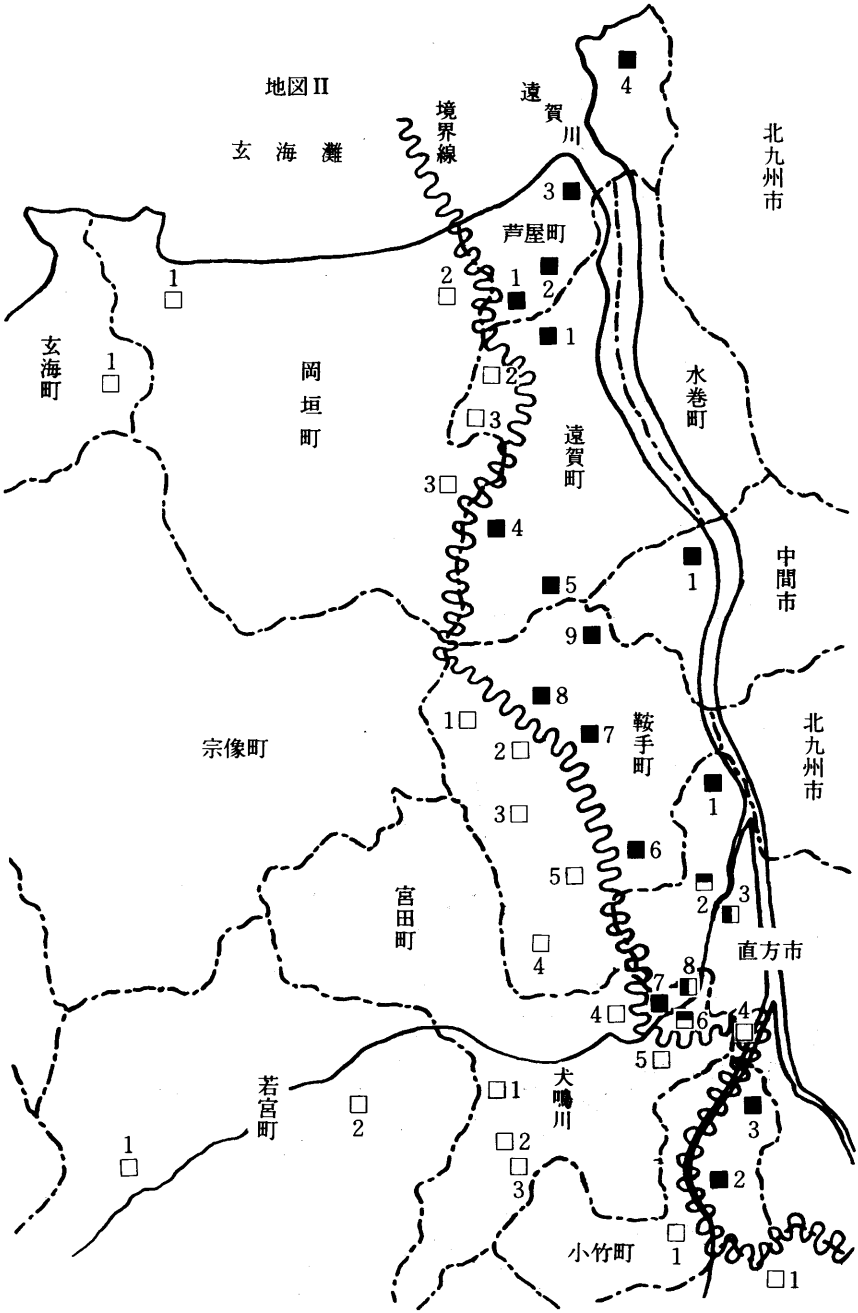
昭和四十八年から五十一年にかけて中断はあったが福岡県方言の調査を行ってきた。そのうち、福岡市とその近郊のアクセントについて、[注1]及び福岡市に代表される筑前アクセントが一型アクセント（筑後式）と接する地点でのアクセント崩壊過程について、[注2]それぞれ考察を加えてきた。この論文では資料としての豊前式アクセントを示すと共に、福岡県北部全体（豊前・筑前・糸島）のアクセントを比較考察するつもりである。

第一節

豊前でのアクセントを掲げるにあたって、調査地点と共に豊前式アクセントと筑前式アクセントとの境界線を示そう。[注3]地図Ⅰ・Ⅱ参照。この地図を見てわかるように豊前・筑前アクセント境界線は、政治的境界である藩境よりずっと西側に位置しているし、さらには、かなり大きな地理的障害となっているはずの遠賀川よりも西側に位置している。つまり豊前式アクセントが筑前地区をかなりの範囲で侵しているわけである。

地図Ⅰ




地図II
玄海灘
境界線
遠賀川
北九州市
芦屋町
玄海町
岡垣町
遠賀町
水巻町
中間市
宗像町
鞍手町
北九州市
宮田町
直方市
若宮町
犬鳴川
小竹町

〔調査地点〕□玄界町　1、畑　□岡垣町　1、内浦　2、榎坂　3、秋藤　□若宮町　1、平原　2、金生　□宮田町　1、所田　2、脇野　3、日陽　4、本城　5、鶴田　6、川東　7、龍徳　8、沖ノ谷　□小竹町　1、中央　2、御徳　3、赤地　□福田町　1、北勢田　□直方市　1、中ノ江　2、谷　3、篠振　4、尾崎　□鞍手町　1、永谷　2、本村　3、古賀　4、里村　5、新北　6、中屋敷　7、山が崎　8、神崎　9、木月　□中間市　1、砂山　□遠賀町　1、鬼津　2、蟹喰　3、尾崎　4、千代丸　5、虫生津　□芦屋町　1、粟屋　2、大城　3、祇園　4、柏原

〔記号説明〕□筑前式アクセント　■豊前式アクセント　▮豊前式アクセント変種1　▮豊前式アクセント変種2

地図Ⅱの説明をしよう。共に東京式である豊前アクセントと筑前アクセントの関係は、前者の型の種類を一つ減じたものが後者となる。それは名詞・動詞・形容詞各々において当てはまることである。そこで一・二拍名詞、二拍動詞、三拍形容詞を使って境界線調査を行った。この付近の調査は平山輝男氏が四十年前に行なわれ、『九州方言音調の研究』（学界之指針社 昭和二十六年刊）に発表しておられるが、筑豊地区を問題にする時、地点数が少ないため新に調査を加えたものである。

境界線は地図Ⅱに波線で示した通りである。この地図で特徴的なことは次の三点である。

一、遠賀町で二地点、蟹喰・尾崎（地点番号 2・3）だけが筑前アクセントであること

二、鞍手町がアクセントの面で二分されていること

三、直方市と宮田町の境界付近でアクセント境界線が入り組んでいること

（一）の二地点は、アクセントだけでなく他の言語事象も異なり、遠賀町地区の寄合がある時もこの二地点の言葉の違いが目立つとのこと。これは過去の生活圏の違いによるものか。（二）の鞍手町の境界線は、昔の村落境界線と一致する。さて（三）の直方市と宮田町との境界地帯であるが、ここではアクセントの乱れを観察できた。以下、この件に関して述べる。

宮田町龍徳から直方市下新入にかけての地区では7名の方からアクセントを聴取することができた。他の地点ではアクセントの型を明確に聴取できたが、この地区は遠賀川流域四十数箇所のうち最も調査時に困難を覚えたところである。そのアクセントは次の如くであった。

直方市下新入谷

一・二・三類＝○⊙▼　○⊙▽　⊙○▽

四・五類＝⊙○▽

この⊙や▼で示した拍はその前後の拍と較べて相対的に高く発音されるものの、その高さの極くわずかなものを示す。また次の発音も耳にすることができた。

直方市下新入篠振

一・二・三類＝○●▼　四・五類＝●○▽

この音調の場合でもかなり丁寧な発音をしていただくと三類語に中高型（○●▽）を聞けるが、この地区以外では普通の発音でそれぞれの体系が明瞭に現われるのに較べると、やはりかなり特異であると言うことができる。

また直方市下新入に隣接する宮田町龍徳の各小字では（一・二）（三）類の間にかなり乱れが甚しい、つまり一・二類語が三類語の型に、三類語が一・二類語の型に発音される場合が多く観察でき

た。この場合も四・五類語には乱れは無かった。（このように四・五類語がほとんど安定してその型をくずさない事実は、筑前南部の一型アクセントとの接触地帯でも見られる。それは、両方言アクセントの基本型がこの頭高型であることに起因すると考えられる。）

豊前地区で詳しい調査を行なったのは、地図Ⅱの諸地点のうち遠賀郡芦屋町祇園、中間市砂山、鞍手郡鞍手町中屋敷、直方市植木である。（ここで言う豊前とは、豊前式アクセントが行なわれている地区を指す。ちなみに上記四地点は地理的・歴史的には筑前に属する。）

これら四地点は豊前地方でもかなり西寄りである。詳細な調査にこういった地点を選んだのは、一地方のアクセントが体系の異るアクセントと衝突したときそれからどのような影響を受けるかをも調べようとしたためである。

まず鞍手町中山中屋敷での調査結果（被調査者は、小長光ハナ子氏。明治四五年生）を次に掲げ、検討しよう。調査語彙は二音節名詞。〔「・」「△」「○」が施されている語は、それぞれパロールとして尾高平型、中高型、頭高型が聞かれた語である。〕

中高型（○●▽）をとる語

垢 足 明日 兄 網 孔 家 池 犬 色 魚 芋 腕 馬 蛙 畝 裏 襟
海老 鬼 甲斐 親 勝ち 髪 瓶 皮 亀 鴨 菊 肝 櫛 廉 杭 串 茎 草
糞 国 組 熊 鞍 栗 籠手 桁 苔 事 米 坂 竿 潮 里 標 舌 塩 島
下 尻 城 脛 鮨 炭 墨 席 芹 咳 蛸 鷹 竜 蓼 谷 為 誰 玉 樽 塚
土 月 許 蔦 綱 鍔 壷 槌 角 面 時 弟子 寺 毒 年 友 縄 供 波
肉 布 蚤 糊 墓 刷毛 恥 縁 花 撥 海苔 鉢 宵 腹 浜 鰻 晴れ 餅
鰻 房 縁 節 房 縁 節 文 鳩 骨的 幕 枡 胸 豆 峰 耳 棟 脇 物
森 山 槍 床 指 夢 闇 弓 百合 枠 業 腋 綿 糖 店 本 脇 元

尾高平型（○●▼）をとる語

痣 鰺 麻 灰汁 梅 蚊 味 鉛 栗毬 烏賊 石 岩 牛 歌 上 枝 丘 音
瓜 甥 沖 柿 垣 顔 鍵 籠 瘡 風 型 余所 仮名 蠶 株 壁 金 鐘 釜
紙 茅 蚊帳 粥 岸 殻 川 雉子 傷 君 霧 北 桐 口 首 暮 鍬 下駄
桑 扉 先 胡麻 鹿 頃 此れ 酒 笹 鯖 鮫 皿 錆 式 品 末 杉 褌 被
砂 蟬 底 袖 其れ 滝 竹 旅 棚 度 次 塵 爪 艶 釣 鉄 床 弦 何処
虎 泥 鳥 梨 夏 庭 軒 縄 箱 灰 端 横 蜂 蓮 橋 鼻 幅 神 羽 髯
膝 肘 昼 鯖 菱 人 暇 紐 嵐 笛 藤 萱 札 筆 腐 程 掘 冬 星 溝
虫 胸 道 宮 村 姪 枕 室 桃 藪 雪 嫁 柴 真似 町 西 水 右

頭高型（●○▽）をとる語

藍 秋 朝 青 赤 跡 汗 姉 尼 綾 鮎 泡 椅子 蟻 息 雨 板 市 糸
今 何時 井戸 稲 蛆 日 海 鱗 栗 奥 桶 帯 笠 貝 藍 厠 糟 方 角
櫂 敷 牡蠣 鍵 神 彼 上 網 牙 蜘蛛 杵 蚤 針 肩 管 靴 雑 夜 雲
黒 今朝 恋 声 今日 琴 鯉 駒 鶯 独楽 朝 猿 鮭 芝 支那 汁 白 筋
鈴 銭 隅 外 其処 蕎麦 側 丈 空 太刀 緩 足袋 種 乳 父 杖 筒 接
常 露 粒 妻 罪 鶴 塔 谷 中 茄子 何 苗 鍋 生 蔦 虹 猫 臭斗 喉 箸
髻 肌 姪 春 針 姫 鮒 服 眉 舟 蛇 他 筵 舞 前 孫 松 股 窓 蔵
富士 蓑 誓 鞭 八重 樹脂 宿 横 故 畏 薬 夜 鍋 我 門 主 毬 味噌
紅

ここで右表をいわゆる「類別」の観点から整理するとどうなるであろうか。

中高型（○●▽）をとる語

一類＝25／130　二類＝9／52　三類＝95／122　四類＝3／67
五類＝1／40

尾高平型（○●▼）をとる語

一類＝94／130　二類＝33／52　三類＝7／122　四類＝3／67
五類＝1／40

頭高型（●○▽）をとる語

一類＝9／130　二類＝10／52　三類＝17／122　四類＝62／67
五類＝36／40

多少出入りはあるが豊前アクセントの体系をとっている（一・二類＝○●▼型、三類＝○●▽型、四・五類＝●○▽型）。

同右表では中高型（○●▽）の語に最も大きな乱れが観察され

る。最終的に中高型に落着いた語の中にパロールとして尾高平型（○●▼）に実現された語がかなりあった。

さて、最初に述べた宮田町龍徳から直方市下新入にかけての地区でのラングとして定着しているとも言える程のアクセントの乱れ、それに右の鞍手町中山中屋敷でのまだパトロール段階ではあるがアクセントのかなりの乱れ、これらの事実の原因をどこに探ればいいであろうか。アクセントが言語の諸要素の中で最も変化を受けにくい部分であるのを考えるとき、このアクセントの乱れにはそれなりの理由が当然考えられねばならない。

この地方の言語主体である住民を歴史の方面から検討してみようこの地方は、現在ではその跡しかとどめていないが、江戸時代から昭和三十年代まで筑豊炭田が栄えていた。それに伴って他地区から多くの人口の流入があった。その辺の記述を以下永末十四雄氏著『筑豊―石炭の地域史』(注4)から引用する。まず江戸時代はどうであったか。

石炭は長い間農閑期の副業として地元の貧農によって採掘されてきたが、生産規模が拡大するにつれ、採掘労働者にも分化を生じ専業の採掘労働者が出現した。「溢者」と偏見でみられた多数の他所者の採掘者が入りこんできた。彼等は普通〈旅人〉と呼ばれたが、採掘の技術に長じる者が多く熟練者として受け入れられたのである。小倉藩より生産規模の大きい福岡藩では相当数に上り、各丁場を転々とした。(38頁)

石炭採掘者は旅人＝熟練者と、農民＝未熟練者に分化が促進された。(39頁)

安政三（一八五六）年、田川郡の石炭山での事件に登場してくる三人の旅人の出生地は、肥後・筑後久留米・長崎などでお互いを結びつけた機縁が見あたらない。この他当時筑豊に流れこんだ旅人の労働者たちの出生地で資料に散見できるのは豊前仲津郡・肥前など北九州一円にまたがっている。彼等の履歴をみると一年ないし二、三年ごとに各石炭山を転々としている。(39頁)

この様に「他所者」が多く集まってきたが、仕事場が「山（ヤマ）」という隔離された場所であったこと、採掘が農閑期にしか行なわれない季節労働であったこと、等により彼等の、地元農民の言葉への影響を考えることはできない。しかし明治維新以後、石炭は諸産業の発展に欠くことのできない位置を占めるに致り、増産が要請されることになる。それに伴って大量の労働者が集まってくる。

明治二〇年～三〇年代の当初でも居村から通勤し納屋住まいをしないいわゆる村方坑夫は、まだかなりの比率を占めた。坑主が地縁を持つ小規模な炭坑ではほとんど村方坑夫によって労働力が構成されていた。

しかし地元農村の過剰労働力だけでは急速に増大する労働者の需要を充足し切れず、筑豊と同じように石炭産地である柏屋郡(注5)・筑後各郡、また広島県・山口県・島根県・大分県など中国・四国・九州の各県の農村を労働力の給源とするようになった。彼等は地租の重圧に堪えきれず、土地を喪失し窮乏におとし入れられた農民であったが、挙家離村する者が多く、中には集落単位で移住してくる場合もあった。

高島や北海道が単身者を誘拐同様の手段で拉致してきたのに

対し、筑豊では家族単位で受け入れ、そのまま労働力の単位となった。単身者の合宿である大納屋より、家族持ちの小納屋が納屋の大部分を占め、自ら一つの集落を形成したのもこのためである。（以上111頁）

また、

一ケ所の炭坑に一年以上定住することが稀なほど移動率が高く、……

ともある。

以上のごとく、多数の人口流入及び筑豊地方内での人口移動があった。

炭鉱労働者とその家族、及び炭鉱関係者がこの地域の人口に占めていた割合はこのように随分大きかったわけであるが、一方では

明治末年より大炭坑を中心として炭鉱町が形成されるが、炭坑は内外の出入りをチェックして、自由な交流を遮断して、労働者を閉塞状態におくことを止めなかった。多くの炭坑で売勘定は坑夫の賃銀収入を回収するメカニズムとして作用したため、物資の自然な流通が阻害され地場経済の発展を抑圧した。坑夫はいつまでも地域社会の住民としてとけこむのを阻止され、町と炭坑の断絶は解消されず炭坑労働者に対する偏見が受けつがれた。（115頁）

という情況が存したため、旧来の地元住民（特に農民）の言葉を変革する力は、その人口から考えられるよりも小さかったであろう。極端な言い方をすれば、一地域で二通りの言語が並んで行なわれていた、とも言えるか。しかし農村からも炭鉱労働者は出ていたわけであるし、関連産業の人口、炭鉱を移動した人々も多い、ためにその影響を無視しさることはできない。

この様に多くの土地から多くの人が集まり一緒に労働し、生活を営んでいる所で使われる言葉は、旧来の地元住民の言葉が基礎になるとは言え、地方共通語の色彩を強く帯びてこざるを得ない。この地域では一般に「川筋ことば」と呼ばれる独特の言葉が形成された。

労働者の流入は、上記の如く、諸地方からあったのだが、やはり、近在の筑前・豊前からの流入が最も多かったと推察できる。そのためこの二地方の言葉が全く日常的に接触していた。こうして、言語の諸要素に変化・混乱が生じ、アクセントも先のような変化が観察できるに至ったのであろう。

では次に理論的な方面からの考察を行ないたい。

炭鉱労働者が各地から集まったとは言っても、彼等の出身地のほとんどは、地元である豊前及び筑前であっただろうことは想像に難くない。これら両方言の話者が長期間にわたって接触すると、理論的にアクセントはどの様な変化を受けるか。

	一類	二類	三類	四類	五類
豊前	○	●▼	○●▽	●○▽	
筑前	○	●▽		●○▽	

（一）筑前では一・二・三類の語群に発音の区別が無い。（二）そのため豊前アクセントの話者は、一～三類の語群を発音し分けることに疑問を感じるようになる。（もっともこの感情は意識の表面に現われる程強いものではないであろう。）（三）また、一・二類語を併せた語数は、三類語の数よりも多い。

右の㈠㈡㈢が豊前アクセントに働くと、直方市下新入篠振で聞かれた様に一・二・三類語がすべて尾高平型に発音される傾向がもたらされるし、鞍手町中山中屋敷できかれたごとく、中高型で発音されるべき語が時として尾高平型に発音されることがある、という結果をもたらす。右の㈠㈡が豊前アクセントに働くと（㈢が働く余地が無い、或は少ない、のは、筑前アクセントとの接触がより頻繁である場合）、宮田町龍徳に際立って見られるように、一・二・三各類にわたって尾高平型と中高型が混乱して聞かれるようになる。○●▽型と○●▼型との間に混乱が生じると、三拍目の助詞の高低が意味をもたなくなる。また第一拍目、低（○）は、音韻としての意味を持たない。こうして、一・二・三各拍の高低が曖昧になると、四・五類語も頭高型を保つ意味がうすれてくる。こうして直方市下新入谷で聞かれたようなアクセントが生じることになる。

第二節

この節では次のA～O各地点の音調（二音節名詞41語）を比較対照して検討を加えたい。

A　福岡市西区姪浜　野上徳兵衛氏（明治29年生）
B　福岡市博多区古門戸　石橋源一郎氏（明治32年生）
C　福岡市東区香住ケ丘　中山瑞枝氏（昭和2年生）
D　宗像郡津屋崎町塩浜　大社文治氏（明治29年生）
E　宗像郡玄海町畑　小田一夫氏（明治36年生）
F　遠賀郡岡垣町内浦（うつら）　秋武源吉氏（明治38年生）
G　遠賀郡遠賀町尾崎　高山国彦氏（明治37年生）
H　遠賀郡芦屋町祇園　佐々木ハナヨ氏（大正4年生）
I　中間市砂山　貞末ハナ子氏（大正5年生）
J　鞍手郡鞍手町中屋敷　小長光ハナ子氏（明治45年生）
K　直方市植木　上野俊市氏（明治40年生）
L　若松半島　a高年層　b中年層　c若年層
M　京都地方
N　東京地方
O　鹿児島地方

なお

A～G地点＝筑前アクセント地帯
H～L地点＝豊前アクセント地帯

L地点のアクセントは添田建治郎氏の論文「福岡県北部地方の方言アクセント―若松半島の方言アクセントの実態と共通語化―」（『語文研究』39・40号）よりの引用。ただし氏の論文に記載されていない語彙もあるため、そこは空白にしておく。M、N、O三地点のアクセントは平山輝男氏編『全国アクセント辞典』によった。また、Nの東京方言アクセントは、ほか二・三のアクセント辞典も参照した。

（地点Mの京都方言アクセントは、平山氏の表記法「0、1、2、1.2.5」をそれぞれ「コ$_0$、テ$_0$、コ$_1$、テ$_2$」に変えて記入、「コ」は高記式、「テ」は低記式を表わし、数字はアクセント核の位置を示す（奥村三雄氏案）また地点Oの鹿児島方言アクセントは、同じく「A、B」を「a、b」に変更して記入。この際M、O両地点アクセントの実際の型は必要としないので省く。）

Pとして表の最下段に示したローマ数字は、M・N・O三地点のアクセント比較から推定される各語が所属する「類」を示す。これは各地点での類の対立が

M 京都	Ⅰ コ0	Ⅱ Ⅲ コ1	Ⅳ テ0	Ⅴ テ2

N 東京	Ⅰ	0	Ⅱ Ⅲ
O 鹿児島	Ⅰ Ⅱ	a	Ⅲ Ⅳ Ⅴ
		2	Ⅳ Ⅴ
		b	1

となっていることを利用して得られる。即ち、

「コ0a」＝一類、「コ1a」＝二類、「コ1b」＝三類、「テ0b」＝四類、「テ1b」＝五類

なお論を進めやすいように、次の型の体系から外れる語のみの比較を行なう。

豊前		筑前	
一・二類	○●▼型	一・二・三類	○●▽型
三類	○●▽型	四・五類	●○▽型
四・五類	●○▽型		

（四・五類語のアクセントは両地方ともに頭高型で、これは先にも述べたように、基本型であるために安定している。よって、ここでは論の対照としない、また以下においては一・二・三類で頭高型をとる語について、特に論じたい。）別表1類参照

〔表のアラビア数字はアクセント核の位置を示す。またA～Lで「○」印を付した語は、頭高型（数字で示せば「1」）をとることを示す。〕

別表1類参照

一類語で高起化が見られる語は、一類語130語のうち60語、46.1％である。以下順に検討していこう。①～⑫の12語「筒、鷺、姉、横、蟻、甲斐、芝、鈴、舞、駒、牛、藤」には、筑前、豊前両地に頭高型を見ることができる。特にこのうち①～③の3語はA～Kの全部或はほとんどの地点で頭高型をとる。⑬、⑭の2語「粥、友」は豊前地区のみで、また⑮～⑲の46語は、筑前地区のみで頭高型をとる。総じて筑前地区で頭高型が多い。このうち、⑮～⑲の「柿、菱胡麻、鮫、右」5語は、筑前のA～G7地点のうち広い地域で頭高型をとり、豊前と好対称をなしている。⑳～㉕の「釣、誰、布、皿末、嫁」の6語は筑前の中でも東部地区（D～G地点）で頭高型をとる。最も顕著な分布をなす語は、㉛～㊵の語である。「桐、鍬、竜塵、蝿、灰、稗、鰭、籾、槍、笛、鳥、首、虫、西、星、雉子、腰、端、杉、袖、甥、株、先、傷、海老、蓮、峰、百合、霧」30語の頭高型は、福岡市の3地点A・B・Cのみにしか頭高型を見ることができない。ここでPの類別を考えてみよう。PはM・N・O三地方のアクセントの型により定まるわけだから、ある語の類別（P）が定まる場合、それは、その語のアクセントが比較的安定していることを、また類別が定まらない場合は、その逆を示していると考えてよい。これをPにおける安定率という言葉で表現しよう。筑前・豊前で共通して頭高型が見られ、それが四地点以上に及ぶ①～⑪の11語と、福岡市のA・B・C3地点のみで頭高型が存在する㉛～㊵の30語のPにおける安定率は、それぞれ45.5％と83.3％である。これから前者の11語は、そも〳〵それらの語の性質として、そのとる型が不安定であり、後者の30語は安定しているといえよう。よって後者㉛～㊵の語がA・B・C三地点で頭高型をとるのは、地域的特性と考えたい。

別表2類参照

第二類で頭高型が見られる語は、二類語52語のうち29語55.8％である。①～⑦の「彼、妻、姫、虹、頃、牙、八重」7語は、筑前・豊前両地方にわたって広く頭高型をとるものが多い。⑧～⑪の「褄、門（かど）、故、方」4語は多く豊前地方で、⑫～㉙の「痣、紙、石、雪、橋、蟬、弦、肱、鰺、昼、栗毬、鞍、殻」の13語は、ほとんどA・

第一類

⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①		
牛	駒	舞	鈴	芝	甲 斐	蟻	横	姉	鷲	筒		
○ ○ ○ 2 2 2 2	○ ○ 2 2 2 2 2	○ ○ ○ 2 2 2 ○	○ ○ ○ ○ ○ 2 2	2 ○ ○ 2 ○ ○ 2	2 2 0 ○ ○ 2 2	○ ○ ○ 2 2 2 ○	2 2 2 2 ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ 2	2 ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	A B C D E F G	
0 0 0 ○	0 2 ○ ○	0 0 ○ 0	0 0 ○ ○	0 0 ○ ○	○ ○ 2 ○	0 ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ 0	○ ○ ○ 0	○ ○ ○ ○	H I J K	
0 0 0			0 0 0					0 ○ ○			La Lb Lc	
コ0 0 a I	テ0 1,2 a	コ0 0 a I	コ0 0 a I	テ0 0,1 a	コ1 1 a	コ0 0 b	コ0 0 a I	コ0 0 a I	コ0 0,1 a	コ0 0,2 b	M N O P	

㉔	㉓	㉒	㉑	⑳	⑲	⑱	⑰	⑯	⑮	⑭	⑬	⑫
末	皿	布	誰	釣	右	鮫	胡 麻	菱	柿	友	粥	藤
2 2 2 2 ○ 2 2	2 2 2 2 ○ 2 2	2 2 2 2 ○ 2 ○	0 ○2 2 2 2 ○ 0	2 2 2 2 2 2 ○	○ ○ ○ ○ ○ 2 2,0	○ 2 2 ○ ○ 2 ○	○ ○ 2 ○ ○ 2 ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ 2	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	2 2 2 2 2 2 2	2 2 2 2 2 2 2	2 2 ○ 2 2 2 2
0 0 0 0	0 0 0 0	0 2 2 0	0 0 2 0	0 0 0 2	0 0 0 0	2 2 0 2	0 0 0 0	0 0 0 0	0 0 0 0	○0 2 2 ○	0 ○2 0 ○	0 ○ 0 0
	0 0 0			0 0 0					0 0 0	○		0 0 ○
コ0 0 a I	コ0 0 a I	テ0 0 a	コ0 1 a	コ0 0 a I	コ0 0 a I	コ0 0,2 a	コ0 0 b	コ0 0 a I	コ0 0 a I	コ1 1,2 a	テ0 0 b	コ0 0 a I

㊲	㊱	㊺	㊹	㊸	㊷	㊶	㊵	㉙	㉘	㉗	㉖	㉕
稗	灰	蠅	塵	竜たつ	鍬	桐	蚊帳	勦	何処	宵	君	嫁
○ ○ ○ 2 2 2 2	○ ○ ○ 2 2 2 2	○ ○ ○ 2 2 2 2	○ ○ ○ 2 2 2 2	○ ○ ○ 2 2 2 2	○ ○ ○ 2 2 2 2	○ ○ ○ 2 2 2 2	○ 2 2 ○ 2 2 2	2 ○ 2 ○ 2 2 2	0 ○ 0 ○0 2 2 0	○ 2 ○ ○ 2 2 2	2 ○ 2 2 ○ 2 0	2 2 2 ○ ○ ○ 2,0
0 0 0 0	0 0 0 0	0 0 0 0	0 0 0 0	0 0 2 0	0 0 0 0	0 2 0 0	0 0 0 0	0 0 2 0	0 0 0 0	0 2 2 0	0 0 0 0	0 0 0 0
	0 0 0		0 0 0		0 0 0	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0 0 0		0 0 0	0 0 0
コ0 0,1 a	コ0 0 a I	コ0 0 a I	コ0 0 a I	コ0 0 a I	テ0 0 a	コ0 0 a I	コ0 0 a I	コ0 0 a I	コ0 1 b	コ0 0 b	コ0 0 a I	コ0 0 a I

㊿	㊾	㊽	㊼	㊻	㊺	㊹	㊸	㊷	㊶	㊵	㊴	㊳
杉	端	腰	雉子	星	西	虫	首	鳥	笛	槍	籾	鰭
2 ○ ○ 2 2 2 2	2 ○ ○ 2 2 2 2	2 ○ ○ 2 2 2 2	2 ○ ○ 2 2 2 2	2 ○ ○ 2 2 2 2	2 ○ ○ 2 2 2 2	2 ○ ○ 2 2 2 2	2 ○ ○ 2 2 2 2	○ ○ ○ 2 2 2 2	○ ○ ○ 2 2 2 2	○ ○ ○ 2 2 2 2	○ ○ ○ 2 2 2 2	○ ○ ○ 2 2 2 2
0 0 0 0	0 0 0 0	0 0 0 0	0 0 0 0	0 0 0 0	0 0 0 0	0 0 0 0	0 0 0 0	0 0 0 0	0 0 0 0	0 2 2 2	0 0 0 0	0 2 0 2
0 0 ○	0 0 0	0 0 0	0 0 0				0 0 0	0 0 0	0 0 0	0 0 0		
コ0 0 a I	コ0 0 b	コ0 0 a I	コ0 0 a I	コ0 0 a I	コ0 0 a I	コ0 0 a I	コ0 0 a I	コ0 0 a I	コ0 0 a I	コ0 0 a I	コ0 0 a I	コ0 0,2 a

①			㊿	㊾	㊽	㊼	㊻	㊺	㊹	㊸	㊷	㊶
彼		第二類	霧	百合	峰	蓮	海老	傷	先	株	甥	袖
○	A		○	○	○	2	2	2	2	2	2	2
○	B		○	○	2	○	○	○	○	○	○	2
○	C		2	2	○	2	2	2	2	2	2	○
○	D		2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
○	E		2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
○	F		2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
○	G		2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
○	H		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
○	I		0	0	2	0	0	0	0	0	0	0
○	J		0	2	2	0	2	0	0	0	0	0
○	K		0	0	2	0	0	0	0	0	0	0
○	La		0		0	0	0	0	0	0	0	0
○	Lb		0		0	0	0	0	0	0	0	0
○	Lc		0		0	0	0	0	0	0	0	0
コ1	M		コ0	コ0	コ0	コ0	コ0	コ0	コ0	コ0	コ0	コ0
1	N		0	0	0,2	0	0	0	0	0	0	0
a	O		a	a	a	a	a	a	a	a	a	a
	P		I	I		I	I	I	I	I	I	I

⑭	⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②
杭	垣	下(しも)	方	故	門(かど)	褄	八重	牙	頃	虹	姫	妻
○	2	2	2	○	2	2	○	2	○	○	○	○
○	○	2	2	2	2	○	○	2	○	○	○	○
2	2	2	2	2	2	2	○	○	0	○	○	○
2	2	2	2	2	2	2	2	○	○	○	○	○
2	2	2	2	○	2	○	2	○	○	○	○	○
2	2	2	2	○	○	2	○	○	○	○	○	○
2	2	2	○	○	2	2	2	○	2	○	○	○
	○	0	0	0	0	0	○	○	0	○	○	○
○	0	○	○	○	○	○	2,0	○	○	○	○	○
2	0	2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2	0	0	2	○	○	○	○	○	○	○	○	○
								○				○
								○				○
								○				○
コ1	コ1	コ1	コ1		コ1	コ1	コ1	コ1	コ1	コ1	コ1	コ1
1	2	2	2	2	1	2	1,2	1	1,2	0,2	1	1
b	a	a	a		b	a	a	a	a	a	a	a
	II	II	II			II						

㉗	㉖	㉕	㉔	㉓	㉒	㉑	⑳	⑲	⑱	⑰	⑯	⑮
栗 毬	昼	鯵	肱	弦	蟬	橋	雪	石	紙	痣	為	文
○ ○ 2 2 2 2 2	2 ○ 2 2 2 2 2	2 ○ 2 2 2 2 2	2 ○ 2 2 2 2 2	○ ○ ○ 2 2 2 2	○ ○ ○ 2 2 2 2	○ ○ ○ 2 2 2 2	2 ○ ○ 2 2 2 2	2 ○ ○ 2 2 2 2	○ ○ ○ ○ 2 2 2	○ ○ ○ ○ 2 2 2	2 2 2 2 2 ○ 2	2 ○ ○ 2 2 2 2
0 2 0 0	0 0 0 0	0 0 0 0	0 0 0 0	0 2 0 0	0 0 0 0	0 0 0 0	0 0 0 0	0 0 0 0	0 2 0 0	0 0 0 0	0 2 2 0	○ 0 2 ○
	0 0 0		0 0 0	0 0 ○	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0 0 0	0 0 0		
テ2 2 a	コ1 2 a Ⅱ	コ1 1 a	コ1 2 a Ⅱ	コ1 2 b Ⅲ	コ1 2 a Ⅱ	コ1 2 a Ⅱ	コ1 2 a Ⅱ	コ1 2 a Ⅱ	コ1 2 a Ⅱ	コ1 2 a Ⅱ	コ1 2 a Ⅱ	コ1 1,2 a

⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①			㉙	㉘
貝	丈	神	太 刀	樹 脂	綾	靴	塔	孫		第三類	殻	鞍
○ 2 ○ ○ 2 2 2	○ ○ ○ ○ ○ ○	2 2 ○ ○ ○ ○ ○	2 2 ○ ○ ○ ○ ○	2 ○ 2 ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ 2 ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	A B C D E F G		○ 2 2 2 2 2 2	○ 2 2 2 2 2 2
○ 2 ○ ○	2 ○ ○ 0	○ ○ ○ ○	2 ○ ○ ○	0 ○ ○ ○	0 ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	H I J K		0 0 0 0	2 2 2 0
2 2 ○		○ ○ ○				○ ○ ○		○ ○ ○	La Lb Lc		0 0 0	2 2
コ1 1 b	コ1 2 b Ⅲ	コ1 1,2 b	コ1 1 b	コ1 2 b Ⅲ	コ1 2 a Ⅱ	コ1 2 b Ⅲ	コ1 1 b	コ1 2 b Ⅲ	M N O P		テ0 2 a	コ1 2 b Ⅲ

㉓	㉒	㉑	⑳	⑲	⑱	⑰	⑯	⑮	⑭	⑬	⑫	⑪
桑	鯛	麻	刷毛	姪	晴れ	垢	撥	髪	戰	畝	泡	斗
○○○○22	22○22○	○○2○22○	22○2222	○○○2222	○2222222	2222222	2222222	2222222	2222222	2222222	2222222	2222222
0○00	2○22	0000	2222	0000	2220	2○○○	2○22	2222○	2222	○○○○	○○○○	○○○○
○○○	2○	0○2		1	テ2 1,2 b	コ1 2 b Ⅲ	コ1 2 b Ⅲ	コ1 2 b Ⅲ	コ1 2 b Ⅲ	コ1 2 b Ⅲ	コ1 2 b Ⅲ	コ1 2 b Ⅲ

注1　語文研究第38号

注2　文学研究第七十五輯

注3　この境界線は、昭和五〇年秋季国語学会で発表したものである

注4　NHKブックス一九九、昭和48年12月発行

注5　粕屋郡は筑前にはいる

B・C3地点のみでそれぞれ頭高型を示す。この後者の語群の現象が、ほかの語と比較して特徴的であること、第一類における㉛～㊱の語群と同じく地域的なものである。また①～⑦の語のPにおける安定率が0％、⑰～㉘の語が61.5％であることも、その地域的特性であることを裏づける。

別表3類参照

三類語で頭高型をとる語は、12.2語中28語＝22.9％で、一・二類に較べるとその率は低い（もっとも単純な比較はあまりできないわけであるが）。①～⑭の「孫、塔、靴、綾、樹脂、太刀、神、貝、膿、海苔、雲、文恋、蛆」14語は、A～G地点（筑前）、H～L地点（豊前）でかなり共通して頭高型をとる。Pにおける安定率は50％。⑮～㉒の「熨斗、泡、畝、嬶、髪、撥、垢」7語は、H～Kの豊前でのみ頭高型が存する。第三類で特徴的なのは、①～⑯の語が豊前地区でほとんどすべて頭高型をとること。これは、豊前アクセントで第三類のみが中高型（一・二類は尾高平型）であることゝ関係していよう。㉓の「桑」は、福岡地区と若松地区がそれぞれ独立に頭高型を示す。残り㉔～㉘の「鯛、麻、刷毛、姪、晴れ」5語は、筑前の西部よりに頭高型が見られる。この5語のPにおける安定率は20％である。これは、第一・二類のうちで、筑前のみに頭高型が観察できた語群の安定率83.3％・61.5％と比較すると極めて低いと言わざるを得ない。また、「両地方で共通して頭高型が多く聴かれる語」と「筑前のみで頭高型が聴かれる語」とのPにおける安定率の比較をしてみても、第一類＝$\frac{45.5}{83.3}$、第二類＝$\frac{0}{61.5}$、第三類＝$\frac{50.0}{20.0}$であり、第三類において分母と分子の比率が逆転していることがわかる。

以上、各類について検討してきたが、一・二・三類を通して見るとどういった現象が窺えるであろうか。

A～Kにおいて一人でも頭高型をとる語は

一類	二類	三類
46.1％（60/130）	55.8％（29/52）	22.9％（28/122）

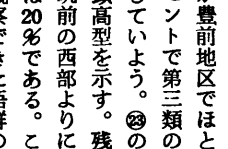
と三類の安定が目立つ。これを更にA～Gの筑前地区とH～Kの豊前地区とに分けてその割合を出すと

《筑前》一類＝44.6％　二類＝53.9％　三類＝15.6％

《豊前》一類＝10.8％　二類＝29.0％　三類＝18.9％

筑前では、一・二類の頭高型の割合が高く三類の頭高型のそれが低いのが目立つ。豊前では一類に頭高型が少なく二類に多い。

次に頭高型をとる語の割合を、第二拍の母音の広い、狭いにより分けてみると、



それぞれの中での頭高型の語の割合は次の如くになる。

《筑前》

	A地点 広	A地点 狭	B地点 広	B地点 狭
母音一類	11.1％	40.8％	12.3％	69.4％
二類	30.3％	31.6％	24.2％	68.4％
三類	7.9％	13.6％	9.5％	11.9％

《豊前》	C地点		D地点		E地点		F地点		G地点		H地点		I地点	
	広	狭	広	狭	広	狭	広	狭	広	狭	広	狭	広	狭
母音一類	9.9%	55.1%	7.4%	18.4%	11.1%	16.3%	6.2%	8.2%	4.9%	12.2%	12%	10.2%	2.5%	12.2%
二類	18.2%	42.1%	18.2%	10.5%	21.2%	5.3%	27.3%	5.3%	18.2%	5.3%	17.3%	15.8%	33.3%	5.3%
三類	14.3%	8.5%	9.5%	11.9%	6.3%	5.1%	6.3%	10.2%	7.9%	11.9%	6.3%	13.6%	11.1%	18.6%

K地点		J地点	
広	狭	広	狭
4.9%	12.2%	4.9%	10.2%
27.3%	5.3%	30.3%	5.3%
9.5%	20.3%	9.5%	16.9%

この表で特に顕著なのは、A・B・C三地点の一・二類語でその第二拍の母音が狭いものに、頭高型をとる語の割合が特に多いことである。この現象はほかの筑前・豊前のどこにも観察できない。頭高型をとる語の率が30%前後の地点も存在するけれども、それはかえって第二拍の母音が広い語であったりする。この事実は、拙稿「筑前方言のアクセントについて」（『語文研究』第三十八号）で甲式・乙式という考え方で説明したものに対応し、その考え方を筑前のほぼ全域にわたって裏づけるものと考えたい。これは、福岡市特に旧博多地区に豊前アクセントが筑前アクセントに変化した名残りをとどめている（一・二類と三類との間に対立がある）、という解釈である。C地点の被調査者も現在は福岡市東区在住であるが、言語形成期には、同博多区に居られた由で、A・B・C三地点、特にB・C地点（博多地区）の特異性が目立つ。

さてこの事実はどのようにして発生したか。言語の規範性ということを考えると、文化の中心地程規範意識が強く、そこから離れるほど薄くなる、とは既に諸家により指摘されているとおりである。規範意識が強ければ言語変化の度合もそれ程はやくはない。アクセントを例にとると、文化の面では歴史的に辺境であった関東部・

東北、九州の一部に一型アクセント（従来のアクセント型の区別が消失したもの）が行なわれているのに対し、京都では現在でも類聚名義抄時代のアクセントにかなり近いものが使われている。博多地区の場合も同様に考えたい。

博多は7世紀の頃から外国船出入の要港として、あるいは太宰府の外港としての位置を占め、西辺の内治・外交・軍事の中枢地点であった。平安中期には千六百戸以上を有する繁華な都市となった。鎌倉時代にはいってもその重要性はかわらず、以後諸大名の支配権確立の争いが続くが室町末には七千戸以上の大都市となった。戦国時代に、焼失した博多の町を豊臣秀吉が再構したことも商業の中心地として栄えていたことを物語る。江戸時代は福岡も含めて三万の人口を保持した。このように西国での博多の優位は歴史的なものであり、特に海外貿易・商業都市としての長期にわたる繁栄があり、それは自ずから言葉に対しても規範意識を形成したであろう。

A・B・C地点（特にB・C）の一・二類語に頭高型が多い、つまりほかの筑前の地点での変化にとり残されて豊前アクセントの名残があるのも右に述べた博多が西国で文化の中心地であることによる言語の規範意識が作用したものと見たい。

受贈雑誌（昭和五十二年四月〜昭和五十三年三月）

比較文学年誌13／ビブリア65・66・67／弘前大学人文学部文経論叢・文学篇XII 12巻3

福島大学教育学部論集・人文科学28の2／文化（東北大）40巻3〜4合・41巻1〜2合／文学科論集（鹿児島大）12／文学研究（九州大）74／文学年誌（文学批評の会）3／文学論輯（九州大教養部）24／文学論藻52／文化と言語（札幌大）10巻2・11巻1／文科報告（鹿児島大教養部）13の第1分冊／文教国文学（広島文教女子大）6／文芸研究（東北大）84・85・86・87／文芸研究（明治大）37／文芸言語研究・言語篇（筑波大）1／文芸言語研究・文芸篇（筑波大）1／文芸と思想（福岡女子大）41・42／文芸と批評4巻8・9／文芸論叢（大谷大）8・9／文芸論叢（立教女子短大）13／文献ジャーナル16巻3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・17巻1・2／文献探究1／文莫（鈴木眼学会）2

平安朝文学研究3巻8

方言研究年報（広島方言研究所）続2／法政大学能学研究所紀要能学研究3／法文学部論集・文学科編（愛媛大）10

萬葉94・95・96／宮城教育大学国語国文8／武庫川国文11・12／明治大学人文科学研究所年報17

野州国文学（国学院大栃木短大）20／山口大学文学会志27／山辺道21

立命館大学377・378・379・380・381・382〜383合・384・385・386〜390合／龍谷大学論集411

論究日本文学40

早稲田大学教育学部学術研究・国語国文学編25